

News Release

9月1日（日）「防災の日」を前に、JA共済連が一人暮らしの15歳～34歳男女に防災対策への意識と実態を調査
一人暮らし若年層のおよそ7割が防災教育を受けたことがあるにも関わらず、
約8割が防災対策ができていない
約7割は自分が被災することを「イメージしたことがない」
しかし、大規模地震が頻発する中、約7割が「今後、防災についてもっと学びたい」
災害リスクアドバイザー・松島康生さんに聞く、「脱・あいまい防災」に向けた“ソフトから始める防災対策”

JA共済連（全国共済農業協同組合連合会・代表理事理事長 村山 美彦）は、防災への機運が高まる9月1日（日）「防災の日」を前に、一人暮らしをする全国の15歳～34歳男女400人と、一人暮らしの子を持つ40歳以上の男女400人を対象に、一人暮らしでの防災に関する意識と実態について調査を行いました。主な調査結果は以下のとおりです。

なお、JA共済連では、防災意識の向上に向けた活動に取り組んでいます。その一環として、10月19日（土）・20日（日）に熊本市で開催される日本最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい2024」に出展しますので、ぜひご来場ください。

15歳～34歳の一人暮らし若年層が最も不安に思う自然災害は「地震」

- 一人暮らしで不安を感じる自然災害1位「地震」（78.3%）。約6割が一人暮らしになって「地震への不安が高まった」（62.3%）。

15歳～34歳は、子どもの頃から国内の大規模地震発生を経験した世代、約7割が防災教育を受けている

- 約7割が「学校の防災教育の授業を受けたことがある」（72.8%）。

一人暮らしで、防災対策を十分に行っているのは16.8%。約7割が被災することを「イメージしたことがない」 対策をしていない理由に「具体的な対応策がわからないから」「お金がないから」が上位

- 「防災対策を十分に行っている」のは16.8%、およそ6人に1人。防災対策をしていないのは「具体的な対応策がわからないから」（40.5%）、「お金がないから」（34.2%）、「面倒だから」（27.9%）など。
- 66.8%は自分が被災することを「イメージしたことがない」、74.5%は被災後にお金がかかることを「考えたことがない」。

一人暮らしで不安が増した今だから、約7割が「防災について学びたい」

- 防災について「もっと学びたい」（71.3%）、「実際に大地震の揺れを体験して学べる場に参加したい」（51.3%）と意欲あり。

一人暮らしの子どもの持つ親の気持ち

- 一人暮らしをする子どもの親の約7割が「子どもの地震への不安」（69.5%）を感じ、約8割が一人暮らしの子どもは「防災対策をしていない」（77.8%）、「防災対策ができていない」（80.3%）と認識。
- 親の60.5%は「子どもに安否確認の連絡をいれている」ものの、17.3%は「連絡が取れず心配を募らせたことがある」。
- 「一人暮らしの子どもの防災対策や防災用品の備蓄を確認した」（20.8%）、「一人暮らしの子どもと防災について話し合っている」（28.0%）は少数派。

「一人暮らしでの防災に関する意識と実態調査」調査概要 ●実施時期：2024年7月12日（金）～7月16日（火） ●調査方法：インターネット調査

●調査対象：一人暮らしをする全国の15歳～34歳男女400人、一人暮らしの子をもつ全国の40歳以上男女400人 ●調査委託先：マクロミル

※本調査に記載の数値は小数第2位以下を四捨五入しているため合計が100%にならない場合があります。

災害リスクアドバイザー・松島康生さんに聞く、ソフトから始める防災対策

—自分が被災することをイメージして具体的な対策をし「脱・あいまい防災」へ。離れて暮らす親とは災害の「怖さ対策」をセットで共有しよう—



日本最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい2024」開催

10月19日（土）・20日（日）熊本市 入場・参加無料

JA共済の『ザブトン教授の防災教室』で、地震の瞬間を体験できる「地震ザブトン」に乗って大震災級の揺れを体験しよう！

■ 一人暮らしで最も不安に思う自然災害は「地震」

女性の不安度が総じて高く、「地震」を不安に感じる女性は88.0%

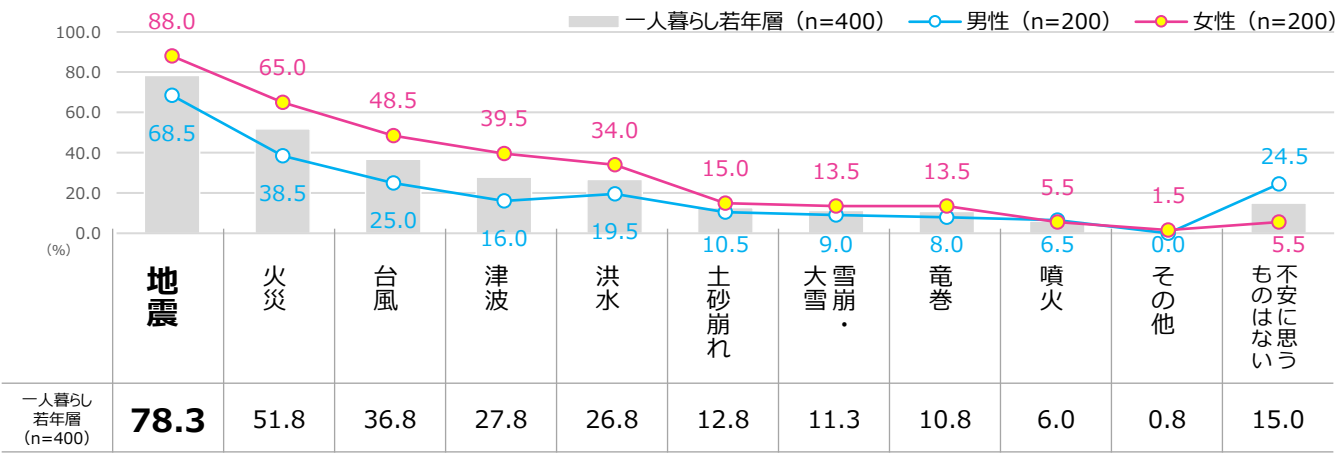
一人暮らしをしている15歳～34歳の男女（以下、一人暮らし若年層）400人を対象に、防災に関する意識と実態について調査を行いました。

まず、一人暮らしで不安に感じる自然災害を聞くと、78.3%が「地震」と答え、最も多くなっています。次いで「火災」（51.8%）、「台風」（36.8%）の順となりました。

男女別で見ると、男女とも「地震」（男性68.5%、女性88.0%）が1位ですが、ほとんどの災害において女性の不安のスコアが高くなっています。一方、男性の約4人に1人は「不安に思うものはない」（24.5%）と答えています【図1】。

【図1】 一人暮らしをする上で不安に感じる自然災害

Q.自然災害について、一人暮らしをする上で不安に感じるものは？（複数回答）

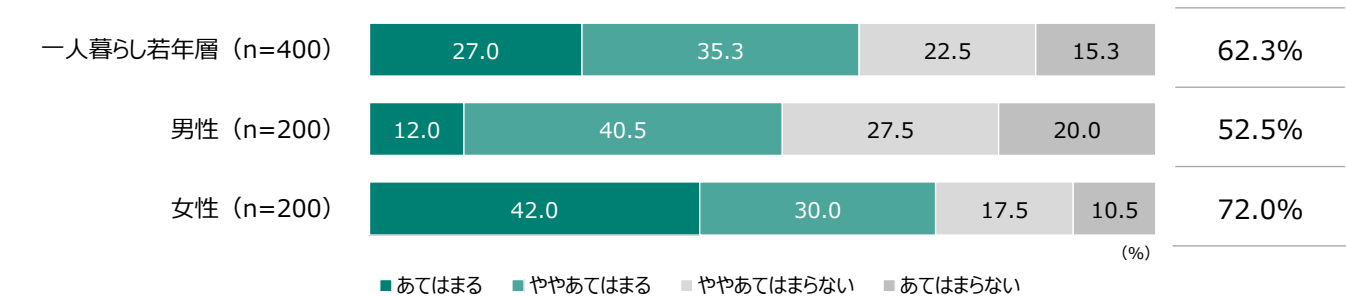


■ 一人暮らしになって地震への「不安が高まった」が約6割、女性の不安は特に高く

一人暮らしになって地震への不安が高まったかと聞くと、「あてはまる」27.0%、「ややあてはまる」35.3%と、「地震への不安が高まった」と感じている一人暮らしの若年層が合計62.3%もいます。男女別で見ると、「不安が高まった」と感じている人は男性52.5%、女性72.0%となり、一人暮らしの女性は、より一層不安を感じています【図2】。

【図2】 地震への不安

Q.一人暮らしになって地震への不安が高まったか？



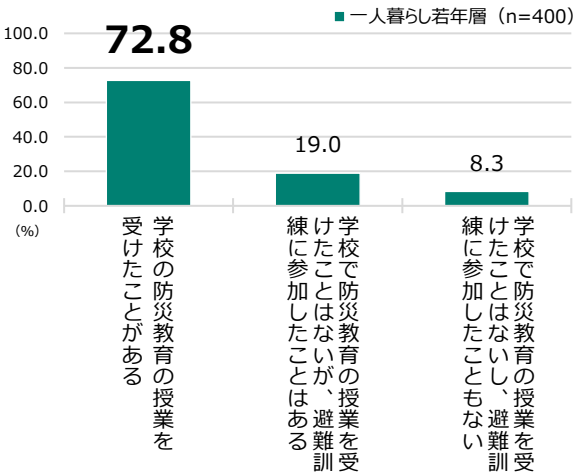
■ 15歳～34歳は、子どもの頃から国内の大規模地震発生を経験してきた世代
約7割が学校で防災教育の授業を受けている

今回の調査対象者である15歳～34歳の若年層は1990年以降に生まれており、1995年の阪神・淡路大震災後に小学校に入学するなど、東日本大震災（2011年）、熊本地震（2016年）、能登半島地震（2024年）といった国内の大規模地震発生を経験してきた世代です。

学校の授業での防災教育（災害の発生メカニズムや災害時における危険の認識・日常的な備えについて学ぶなど）について聞くと、72.8%が「学校の防災教育の授業を受けたことがある」と答えています【図3】。

【図3】 防災教育の経験

Q.学校の授業として防災教育を受けた経験はあるか？

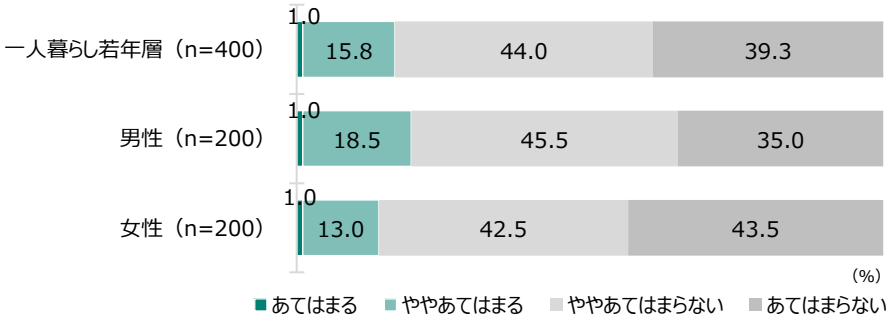


■ 一人暮らしの今、「防災対策を十分に行っている」は16.8%

一人暮らしをしている今現在、防災対策を十分に行っているかを聞くと、「行っている」（あてはまる＋ややあてはまる）と答えたのは16.8%とおおよそ6人に1人でした。男女別に見ると、防災対策を「行っている」と答えた人は、災害への不安が大きい女性（14.0%）の方が男性（19.5%）より少なくなっています。

【図4】 現在の防災対策

Q.現在、防災対策を十分に行っているか？



あてはまる計 (行っている)	あてはまらない計 (行っていない)
16.8%	83.3%
19.5%	80.5%
14.0%	86.0%

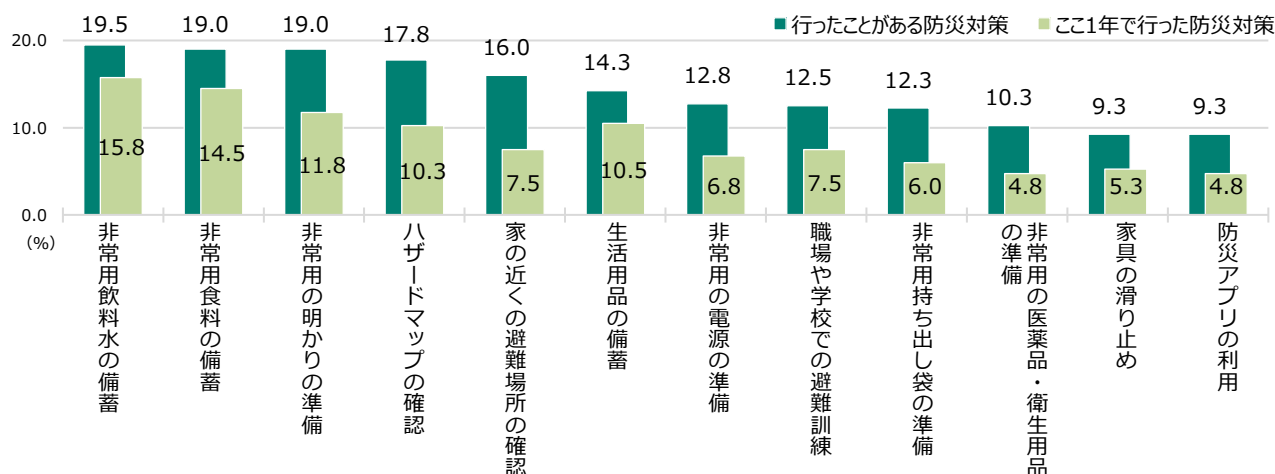
■ 行っている防災対策は、非常用の「飲用水」・「食料」備蓄が2割程度

一人暮らし若年層に現在の住まいで行っている防災対策の内容を聞いたところ、行ったことがあるのは「非常用飲料水の備蓄」（19.5%）、「非常用食料の備蓄」（19.0%）、懐中電灯、ランタン、ろうそくなど「非常用の明かりの準備」（19.0%）などで、いずれも2割以下でした。また、この1年以内に行った対策でも、実践率が最も高い「非常用飲料水の備蓄」でも15.8%、「家具の滑り止め」を行っている人は5.3%となりました【図5】。

【図5】今の住まいで行った防災対策

Q.現在お住まいの環境で行ったことがある防災対策は？ 1年以内に行った防災対策は？（複数回答）

一人暮らし若年層（n=400）



■ 防災対策を十分に行わない理由

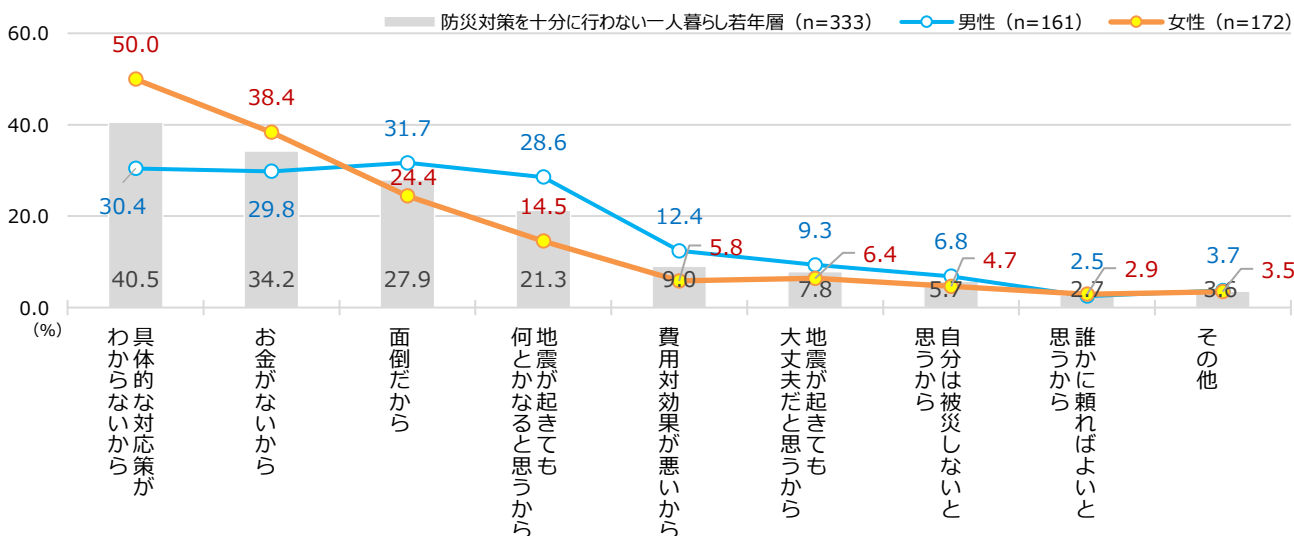
「具体的な対応策がわからない」「お金がない」「面倒」「何とかなると思う」

現在、防災対策を「十分に行っていない」333人（【図4】参照）に行わない理由を聞きました。すると、「具体的な対応策がわからないから」（40.5%）が最も多く、次いで「お金がないから」（34.2%）、「面倒だから」（27.9%）と続き、2割の人は「地震が起きても何とかなると思うから」（21.3%）と答えています。

男女別で見ると、女性は「具体的な対応策がわからないから」（女性50.0%、男性30.4%）が、男性に比べ多く、男性は「地震が起きても何とかなると思うから」（男性28.6%、女性14.5%）が女性に比べ多くなっています【図6】。

【図6】防災対策を十分に行わない理由

Q. 防災対策を十分に行わない理由は？（複数回答）



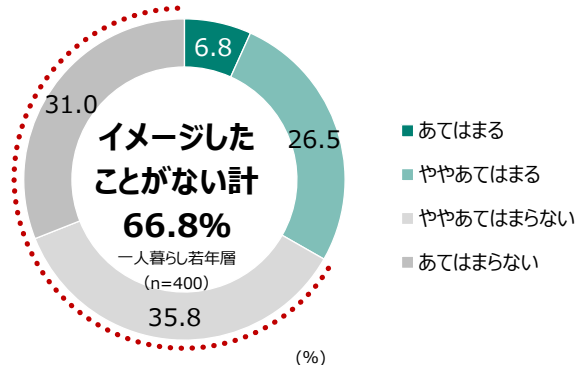
■ もしも被災したら…？ 約7割は自分が被災することを「イメージしたことがない」、生活立て直しの費用は「考えたことがない」が7割。

日本は地震大国と呼ばれますが、一人暮らし若年層に、被災することをイメージしたことがあるかと尋ねると、約7割は具体的に「イメージしたことがない」（66.8%）と答え〔図7〕、自分が被災した場合、生活立て直しのお金についておよそ4人中3人は「考えたことがない」（74.5%）と答えています〔図8〕。

もし地震が起きて家財や家屋が損壊し、現在の住まいに住めなくなった場合、生活の立て直しにいくらかい費用がかかると思うかと聞くと、約8割が「100万円以下」（78.4%）と答えています〔図9〕。

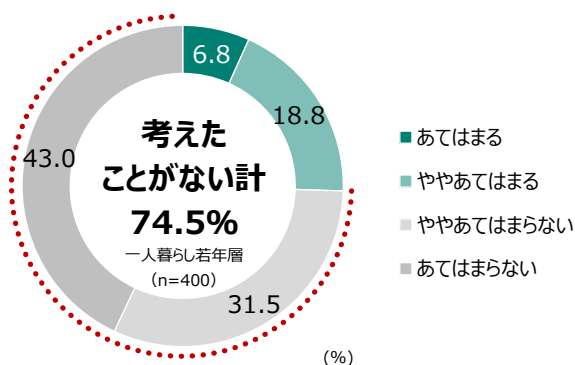
〔図7〕 自分が被災することを具体的にイメージした経験

Q.自分が被災することを具体的にイメージしたことがあるか？



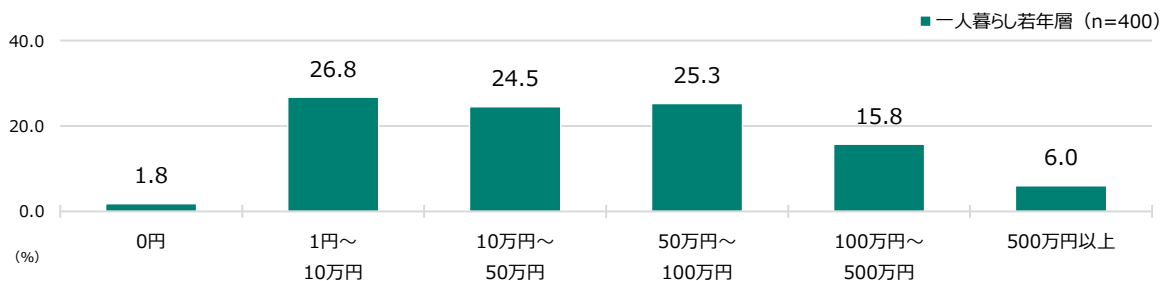
〔図8〕 被災した際、生活の立て直しに お金がかかることを考えた経験

Q.被災後の生活の立て直しにいくらかいお金がかかるかを考えたことがあるか？



〔図9〕 地震が起きて家屋が倒壊した場合、生活の立て直しにかかる費用

Q.地震が起きて家財や家屋が損壊し、現在の住まいに住めなくなった場合、生活の立て直しにいくらかい費用がかかると思うか？

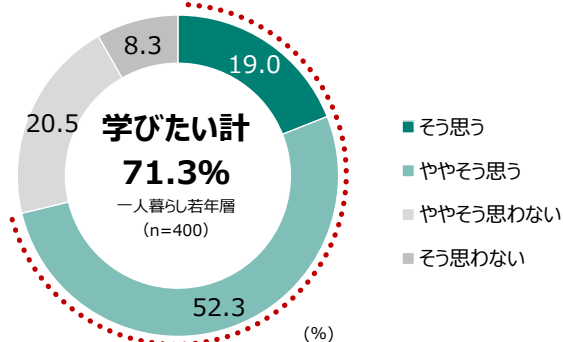


■ 一人暮らしで、不安が増した今、約7割が「防災についてもっと学びたい」

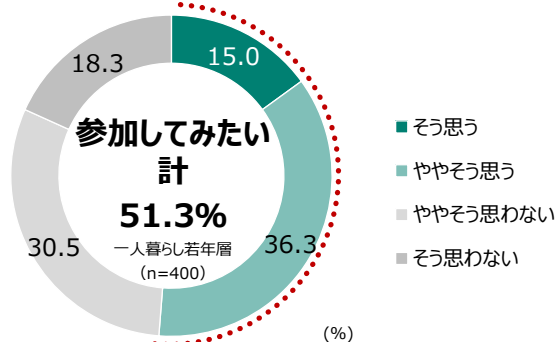
一人暮らし若年層に、今後、防災についてもっと学びたいかと聞くと、約7割が「学びたい」（71.3%）と答え、半数が「実際に大地震の揺れを体験して学べる場に参加してみたい」（51.3%）と答えています〔図10〕。防災対策も防災意識も十分とは言えない一人暮らし若年層。だからこそ、改めて「学びたい」「体験したい」という防災への意欲が高まっているようです。

〔図10〕 一人暮らし若年層の防災についての意識

Q.防災についてもっと学びたいか？



Q.実際に大地震の揺れを体験して学べる場に参加してみたいか？

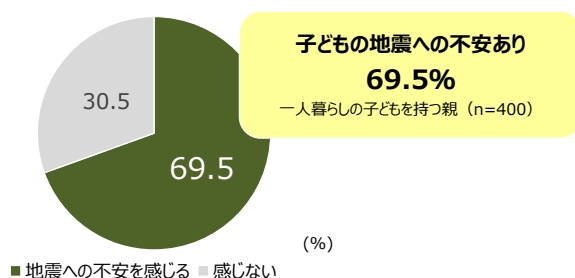


■ 一人暮らしをする子どもの親の不安も「地震」

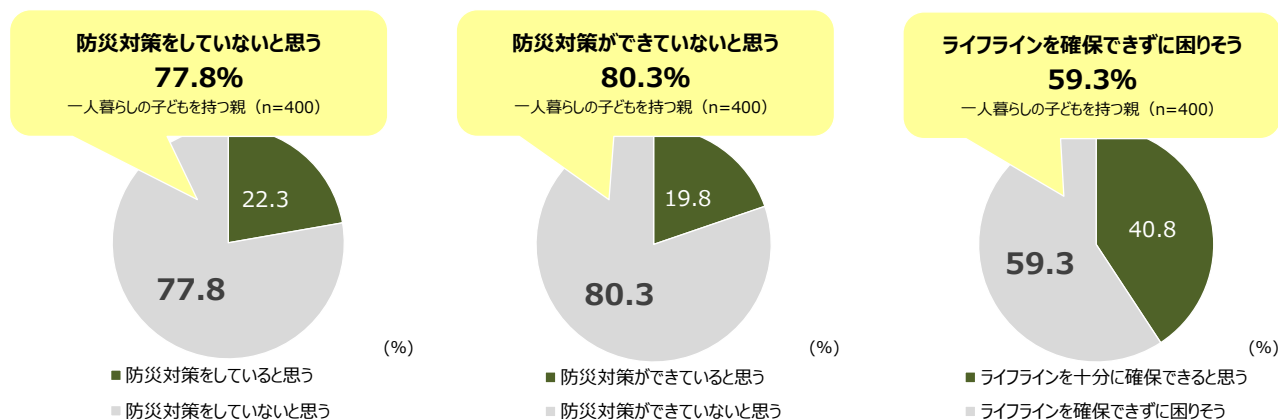
子どもは防災対策を「していない」「できていない」

一人暮らしの子どもを持つ40歳以上の親400人に聞きました。一人暮らしの子どもを持つ親の約7割が「子どもの地震への不安を感じる」（69.5%）と答えています。〔図11〕、子どもの防災対策について、77.8%は「防災対策をしていないと思う」、80.3%は「防災対策ができていないと思う」と答え、59.3%が「ライフラインを確保できずに困りそう」と心配しています〔図12〕。

〔図11〕 一人暮らしの子ども地震への不安を感じる



〔図12〕 一人暮らしをする子どもの防災対策は…



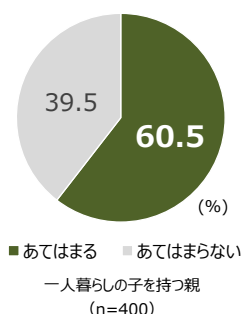
■ 一人暮らしの子どもの防災対策を確認した親は2割

防災について一人暮らしの子どもと話し合った親も約3割のみ

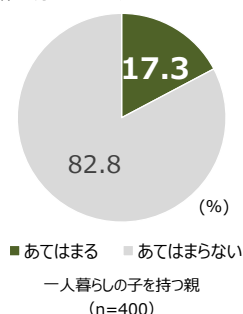
災害時や災害対策に関する親子でのコミュニケーションについて聞いてみました。一人暮らしの子どもが住むエリアでの災害発生時には、60.5%の親が「子どもに安否確認の連絡をいれている」ものの、親の約6人に1人は「連絡が取れず心配を募らせたことがある」（17.3%）と答えています。一人暮らしの子どもの防災対策ができていないと思っているものの、「防災対策や防災用品の備蓄を確認した」親は20.8%、「一人暮らしの子どもと防災について話し合っている」親は28.0%とどちらも少数派でした〔図13〕。

〔図13〕 災害対策に関する、一人暮らしをする子どもとのコミュニケーション

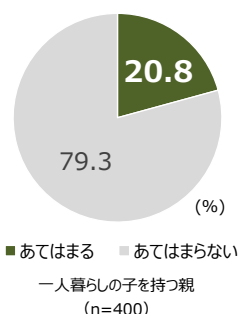
Q.一人暮らしの子どもが住むエリアでの災害発生時に子どもに安否確認の連絡をいれている



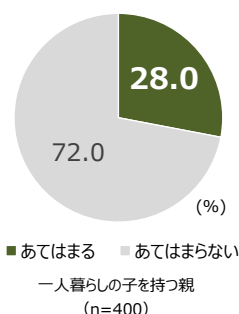
Q. 災害発生時に一人暮らしの子どもに連絡をしたが、連絡が取れず心配を募らせたことがある



Q.一人暮らしの子どもの防災対策や防災用品の備蓄を確認したことがある



Q.一人暮らしの子どもと防災について話し合っている



■ 防災教育を受けているだけに、自分の防災が十分ではないと感じてしまう、15歳～34歳優先順位と具体策が見えずに“あいまい防災”に

一人暮らしの15歳～34歳男女の約7割が、自分が被災することを具体的にイメージしたことがないと答えています。私の考えでは「イメージができない」のだと思います。今、25歳未満の人は東日本大震災当時は小学生以下で、ニュースを通じて見聞きしている人が多く、親世代も地震や津波の怖さや悲惨さを話したがないため、自分が被災するイメージができないのではないかと考えます。その一方で、学校での防災教育は正しく受けているので、防災知識もあり、身を守るという意識も身に付いています。だからこそ、自分の防災対策が、習ったことに比べて十分ではないと感じる人が多いのではないのでしょうか。防災対策をしない理由を聞くと、「具体的な対応策がわからない」が一番多くなっていますが、何を優先して具体的に何からやるべきかが見えていないからあいまいな状態になり、「わからないままで対策しない」と考えられます。また、「お金がない」も多くなっていますが、遊びや趣味を優先したい年代ですから、防災にお金をかけるのは後回しになるのでしょうか。

■ 住んでいる場所のハザードマップを確認し、具体的な対策を考え「脱・あいまい防災」へ

では、具体的に何をすべきかという、まずは自分の住んでいる場所はどのようなリスクがあるのかを、ハザードマップを見て確認しましょう。ハザードマップで液状化リスクの高い地域であれば、上水道や下水道、電気などのライフラインのリスクが高いことを意味します。今のうちに水の備蓄や、トイレのための処理袋や凝固剤を準備しておきましょう。また、住んでいる家の建物の建築年も確認しましょう。特に昭和55（1980）年以前の建物は全壊率が高いため、いつ頃建てられたものなのか、耐震化されているのかを、物件選びの際にもぜひチェックするようにしましょう。

■ 親子で学ぶ防災対策 災害の怖さだけでなく対策もセットで会話をしよう

防災対策というと、つい水や食料などの備蓄を考えがちです。いわゆるハード対策が優先してしまうのですが、もっと重要なのは、「人」に対してのソフト対策です。学校で教わる防災教育をベースにして、大地震が起きたらどうなるのか？というストーリー、津波は高波や高潮とどう違うかなどのような話を親子でしていただきたいと思います。その際に、危険性だけを強調するのではなく、被害に遭わないためにはどんな知識が必要なのか、避難や対策、備えについて「災害と対策」をセットで話をしてほしいと思います。親世代も古い間違った認識のままだったりするので、お子さんの一人暮らしをきっかけに、親子で一緒に学ぶことをお勧めします。子どもといっても正しい防災教育を受けている年代なので防災知識は高いと思います。逆に若年層から親に働きかけるのもよいでしょう。

■ 連絡方法は複数共有、親子が暮らす自治体の防災メールをお互いに登録しよう

災害発生時、まず最初に心配するのが「家族の安否」です。連絡をする際、携帯電話やLINEを使われる方も多いと思いますが、災害直後は使えなくなることもあるので、複数の連絡方法を共有しておくことが大切です。InstagramやXやフェイスブックなどのSNSを共有したり、災害用伝言ダイヤルは「主たる電話番号（自宅や携帯）」を事前に決めておくことが大切です。また、実家と一人暮らし先の自治体の防災メールをお互いに登録しておくことで、相手の住んでいる地域の気象状況や災害情報、避難情報をメールで把握することもでき、お互いの「心配」が軽減することにもつながるでしょう。「防災の日」をきっかけにそんな会話もお勧めします。



松島康生（まつしまやすお）さん 災害リスク評価研究所 代表（災害リスクアドバイザー）

国や自治体向け防災コンサルタントのプロデューサーとして地震被害想定調査、ハザードマップ、地域防災計画の業務に携わり、国土交通省や文化庁の防災委員も務めた。2011年、東日本大震災を契機に行政から民間にシフトし「災害リスク評価研究所」を設立。企業や病院、高齢者施設、自治会向けに、地震や風水害が発生した時の災害リスクを詳細に調査して、これに適した対策アドバイスやBCP（事業継続計画）の支援、実践型防災訓練の指導をしている。他に立正大学外部研究員やFMラジオの防災番組のパーソナリティーなど。

■ JA共済連は今年も「ぼうさいこくたい」に『ザブトン教授の防災教室』を出展します

JA共済連は、2年前から「ぼうさいこくたい」に出展しており、今年で3回目の出展となります。『ザブトン教授の防災教室』では、イス型の地震動体験装置「地震ザブトン」により、東日本大震災や熊本地震など、過去に発生した大地震の揺れや、今後想定される南海トラフ地震などの揺れを疑似体験することができます。

今回の「ぼうさいこくたい」への出展にあたっては、地元・熊本大学の学生とコラボレーションし、熊本地震の教訓等について考えるきっかけを提供するため、オリジナルコンテンツを制作しています。

来場者の皆さんには、地震の瞬間を体験いただき、地震の実相や家具の固定など日頃から「備える」ことの必要性を伝え、また一人一人が正しく恐れて、対策を考える機会を創出することで、皆さんと防災意識を高めていきたいと考えています。



「昨年度のぼうさいこくたい」での様子

■ 日本最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい」 熊本地震から8年目となる熊本県で開催

防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）は、国（内閣府等）が主催する日本最大級の防災イベントです。今回で9回目となる2024（令和6）年の「ぼうさいこくたい」は、「復興への希望を、熊本から全国へ～伝えるばい熊本！ がんばるばい日本！」をテーマに、熊本地震発生（2016年）から8年目となる熊本県で、10月19日（土）・20日（日）に開催されます。全国から多くの方が集い、これまでの災害について振り返っていただくとともに、併催される「『世界津波の日』2024高校生サミット in 熊本」とも連携して、災害を教訓とした防災の取り組み、「創造的復興」の取り組みを熊本の地から全国に発信することによって、被災地に希望のともしびをつなぎ、国民の防災意識の向上を図る機会にしたいと考えています。

日本は、地震、津波、大雨、台風、火山噴火、降雪等、さまざまな自然災害を受けやすい環境にあります。災害はいつ起こるか分かりません。今年の「ぼうさいこくたい」が、被災地復興へのエールとなり、国民一人一人のさらなる防災意識の向上や、激甚化・頻発化する災害に対する備えにつながれば幸いです。

（出典：<https://bosai-kokutai.jp/2024/>）